

# マタラムの建国年次について

——『ババッド・タナ・ジャウイ』という

文学と歴史のはざまで——

深 見 純 生

## は じ め に

マタラム (Mataram) 王国は16世紀後半にジャワ島中部に興り、17世紀に東南アジア屈指の強国に発展した。この重要な国の建国年次について見解の相違がみられる。本稿はその背後にある事情を明らかにし、あわせて研究の現段階においては1578年を建国年次とみるべきことを示そうとするものである。その事情とは、年次の計算方法の問題ではなく、パマナハン (Pamanahan) がバジャン (Pajang) 支配下でマタラム領主になった年を建国年とするか、その子セノパティ<sup>1)</sup> (Senopati) がバジャンの王に代わってジャワ全土の王たるべき地位をえたとされる年とするかという違いである。その背景には、こうした歴史叙述が依拠するジャワ語の文献の性質に由来する問題がある。

## 1 日本における諸見解

日本における見解の相違は高校の世界史Bの教科書にも現れている。い

---

\* 本学国際教養学部

キーワード：マタラム、『ババッド・タナ・ジャウイ』、パマナハン、セノパティ

ま筆者の手元にある4種の教科書および関連書をみると次のようになる。

山川出版社（2008年，120頁）16世紀末～1755

帝国書院（2009年，115頁）16世紀末～1755

東京書籍（2009年，217頁）16世紀半ば～1755

実教出版（2009年，228頁）1582ごろ～1755

『世界史B用語集』（山川出版社2009年，143頁）16世紀末～1755

『詳説世界史 改訂版 教授資料』（山川出版社2009年，359頁）16世紀末

『世界史小辞典』（山川出版社2004年，669頁）16世紀末～1755

『必携世界史用語』（実教出版2009年，178頁）1582ごろ～1755

16世紀半ば，1582年ごろ，16世紀末と3種類の意見のあることがわかる。つぎに，おそらく教科書執筆の参考に資されるであろう，いくつかの事典や概説的通史におけるマタラム建国の説明をみておく。刊行順に取り上げることにする<sup>2)</sup>。

- 1 「1582年ごろから1755年まで」「建国者セーナパティについては正確なことはわからない。」〔永積1961：352-3〕
- 2 「マタラム王国の建設者はセーナパティといい，1582年から1601年まで在位したことになっている。」〔永積1977：177-8〕
- 3 「それ〔パジャン〕をまたスノパティが破って，1586年パジャンから遠くないところにマタラム国を建てた」〔鈴木1977：63〕
- 4 「パマナハンがマタラム王国をたて，その息子セーナパティ（位1584頃-1601）云々」〔建国年次は記されない。〕〔生田1984：247〕
- 5 「王国の起源は1578年ごろにさかのぼり建国者はスノパティとされるが」〔土屋1991：407〕
- 6 パマナハンは「1570年ごろにマタラムの地を与えられ」「かれは1584年ごろ死去し，その息子パヌンバハン・セーナパティ・インガラ

## マタラムの建国年次について

- ガ（在位1584ころ～1601）がそのあとを継いだ。」〔生田1998：364〕
- 7 「マタラムの地に〔中略〕パマナハンが勢力を扶植した。」〔年次は記されない。〕「パマナハンの子スノパティ（在位1584-1601）の時代、マタラムはパジャンから独立した。」〔弘末1999：116〕
- 8 「マタラム国は、パジャンに仕えるパマナハンが未開の地マタラムを開き、その子のセナパティが自立したものである。1580年ころと推定される。」〔深見2008b：426〕

セノパティを建国者と明記する場合とそうでない場合、またその父パマナハンに言及する場合とそうでない場合がある。年次については1570年代から1580年代にかけて一定しない。ただし、16世紀末とするものはない。

もちろんこうした見解の相違は日本に限らない。インドネシアでも、欧文献でも同様である。それを紹介する前に、『ババッド・タナ・ジャウイ』でマタラムの建国の事情がどのように書かれているかを示しておくのが読者の便宜であらう。

## 2 『ババッド・タナ・ジャウイ』にみるあらすじ

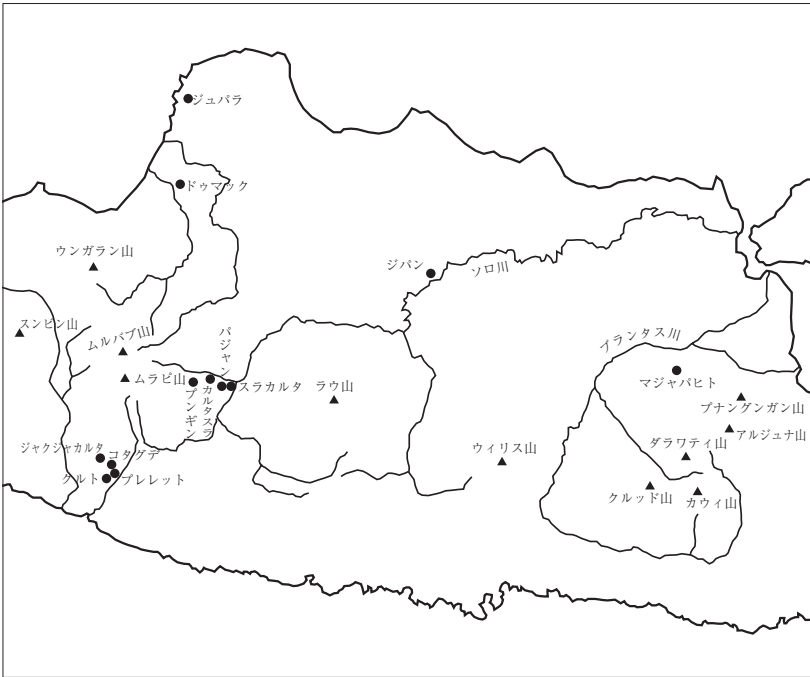
見解の相違が生じる根本的な原因は、マタラム建国の説明が主に『ババッド・タナ・ジャウイ (Babad Tanah Jawi, ジャワ国縁起)』（以下 BTJ とする）というジャワ語の文献に依拠していることにある。上記の日本語の資料では生田〔1998：363-4〕が BTJ の内容を比較的よく紹介しているが、ここでは非常に多くのバージョンのある BTJ のなかで国際的にもっとも流布している、いわゆるメインスマ (Meinsma) 版のオランダ語訳〔Ras 1987b: 55-100〕によって筆者が整理したものを示しておく。刊行された BTJ ではいわゆるバライプスタカ (Balai Pustaka) 版（ジャワ文字・ジャワ語）が最も真正性が高いとされるが、メインスマ版はこれと同系統のテキストであり、物語の大筋は一致している〔Ras 1987b: XIV-XXI〕。

- 1 パジャンのジョコ・ティンキル (Joko Tingkir, 別名アディウイジョヨ Adiwijoyo) に仕えていたパマナハンは、ジョコ・ティンキルのライバルであるジパン (Jipang) のアルヨ・パナンサン (Aryo Panangsang) を倒した。
- 2 ジョコ・ティンキルはパジャンのスルタンに即位した。
- 3 パマナハンがアルヨ・パナンサンを倒した報償として、ジョコ・ティンキルから約束どおりマタラムを与えられた。ただし、ジョコ・ティンキルはその約束をなかなか実行せず、イスラム聖者スナン・カリジョゴ (Sunan Kalijogo) に説得されてようやく実行した。
- 4 パマナハンが死ぬと息子のセノパティがマタラム領主を継いだ。
- 5 その後セノパティはジョコ・ティンキルとの戦いに勝利した。
- 6 ジョコ・ティンキルの死後、実子のベノウォ (Benowo) はジパン領主とされ、女婿 (ベノウォの姉の夫) であるドゥマック (Demak) 領主のブンギリ (Pangiri) がパジャンのスルタン位を継いだ。[なお、セノパティは若くしてジョコ・ティンキルの養子になっていたもので、ベノウォおよびブンギリの義兄である。]
- 7 セノパティはベノウォに協力してブンギリに勝利した。
- 8 この時ベノウォはセノパティにパジャンの王位を譲ると申し出た。セノパティはこれを断り、ベノウォをパジャンの王 (スルタン) とし、自らはマタラムの王 (スルタン) となった。しかしセノパティはパジャンにあったプソコ (pusoko, 王権の正統性を示す神器) を入手しマタラムに運んだ。(資料参照)
- 9 その後セノパティは中部ジャワさらに東部ジャワ各地に支配をのばした。

我々は上の1～9の経緯は、ジャワの王国の正統な王位がマジャパヒト (Majapahit) ・ドゥマック ・パジャン ・マタラムと継承されたという、BTJ

## マタラムの建国年次について

### 地図 中・東部ジャワ（16世紀）



の過去認識の枠組みの中の一部であること、したがって、パジャヤンの王位の継承はジャワの正統な王位のそれという含意を有することに留意しておく必要がある。というのも、BTJは18～19世紀のマタラム宮廷で詠まれたもので、マタラム王家とその時点の王の支配の正統性を謳うことを目的とする作品だからである。本来口承文学であり、我々が利用するのはそれが書き留められたものである。その内容は、預言者アダムに始まり、神話伝説の神々・諸王を経てマジャパヒト・ドゥマック・パジャヤン・マタラムと連なるジャワの諸王の系譜を語るものである。BTJは本質的に文学作品あるいは文学的歴史叙述というべきものであるが、セノパティ以前についてはとくに神話的、神秘主義的傾向が強い<sup>3)</sup>。ここには、パマナハンやセノ

パティとその事跡を歴史的事実とみなすかどうかという歴史記述の本質に関わる問題がある。言い換えれば、BTJ を文学として読むのか歴史として読むのかという問題である。しかしながら、本稿で取り上げる問題は、歴史的事実とみなす立場に立つ記述においても、マタラムの建国年次について意見が分かれていることである。

### 3 インドネシアの場合

インドネシアの歴史学界が総力をあげて編纂したといわれる『インドネシア国史 (Sejarah Nasional Indonesia)』(初版1975年, 全6巻)<sup>4)</sup>の最後の版である第4版(1984年, 全6巻)の第3巻「イスラム王国の形成と展開」[Uka 1992]は、マタラム建国の経緯を扱わない。索引でもパマナハンは見られず、セノパティは1度だけである。また文献目録ではドゥ・フラーフ (De Graaf) の著作7点をあげながら、この問題を詳しく論じる1954年の著作(第6節参照)をあげていない。マタラム建国の経緯を取り上げない理由はわからない。パマナハンとセノパティの歴史的事実性を認めない立場の可能性があるが、この巻は社会や文化の諸側面の叙述が中心をなしていて、通有の政治史的記述がなされないためとも考えられる。

他方、筆者の手元にあるその他の文献はいずれも2人の歴史的事実性を認める記述をしている。まず2種の百科事典をみると、そのひとつ [Mulia n. d.] では、パマナハンを建国者とみるらしい項目 (Mataram; Senapati) がある一方で、セノパティをマタラム初代王とする項目 (Pamanahan) がある。パマナハンがマタラムに入った年次は1568年、彼が死去しセノパティが継いだのは1575年とされる。

もう一つの百科事典のふたつの項目 (Mataram; Senapati) [Masyhuri 1990ab] をみると、セノパティを建国者とするが、父パマナハンが死去しセノパティが継承した年次は1575年、1584年のふたつをあげている。バジャ

## マタラムの建国年次について

ンのスルタン死去の年次も1582年と1588年のふたつをあげている。

5種の高校の歴史(Sejarah)の教科書は、マタラム建国の扱い方の繁簡は様々であるが、セノパティを建国者とすることでは一致している。年次について相違のみられる場合もあるが、1575年にパマナハンが死去しセノパティがマタラム領主を継承したことは一致している。

このうち2種〔Magdalia 2003; Yulianti 2007〕は、この1575年を以てマタラム王国の建国とする。1種〔Muhamad 2008〕はこれを以て建国としながら、マタラムの初代王セノパティの在位を1586～1601年とする。他の2種〔Habib 2007; I 2006〕は、セノパティが1575年にマタラムの領主になったとし、マタラム王国の成立は1586年としている。この1586年は、パジャンのスルタン・アディウィジョヨの死後、その実子のベノウォから養子のセノパティに王位が委譲された年のことである。この王位はマタラム地方ではなく、ジャワ全土の王位を意識している。

インドネシアの教科書では小学校5・6年生用の『祖国の歴史(Sejarah Tanah Air)』〔スロト1983〕と中学校1～3年生用の『インドネシア国史(Sejarah Nasional Indonesia)』〔インドネシア共和国教育文化省1982〕が日本語訳されている。前者ではセノパティが1575年に父を継いでマタラム太守となり、1582年にパジャンのスルタンに勝利し、1586年に全マタラム〔このマタラムはジャワの間違いであろう〕を支配したとする。後者ではパマナハンに触れないなど詳細を述べずに、セノパティを創設者とし、その在位年を1588-1601年としている。

以上の百科事典と教科書の他に、セノパティを建国者と明記しない文献もあり〔Purwadi 2007; Hamamintadipura 2006〕、インドネシアにおいてセノパティを建国者とする説が支配的というわけではない。またセノパティを建国者としつつパジャンのスルタンからの継承を1582年とするものもある〔Bambang 2008〕。

マタラム王国の建国年次について、それが記される場合に、つぎのような諸説があることになる。

パマナハンがマタラムの領主になった1568年。

パマナハンが死去しセノパティがマタラム領主を継承した1575年、1584年。

セノパティがパジャンのスルタン位（ジャワの王位）を継承した1582年、1586年、1588年。

なお、これと連動しているパジャンのスルタンの死去については1582年、1586年、1587年、1588年説がある。

#### 4 欧 文 文 献

東南アジア史の通史として定評のあるホールは、BTJ の記す建国の経緯を紹介した上で、その歴史的事実性を否定するベルフ (C. C. Berg) の説と、実在性を肯定して詳細に論じるドゥ・フラーフの立場を紹介する。そして、いずれにせよスルタン・アグンが登場するかなり以前からマタラムの拡大の基盤ができていたとする〔Hall 1981: 303-307〕。同じく浩瀚な東南アジア通史においてアンダヤは、パマナハンに触れず、またセノパティを実像不明の人物として、マタラム建国の経緯を語らない。ホールと同じ立場のようであるが、ドゥ・フラーフ説よりもベルフ説に賛成のように思われる〔Andaya 1992: 418, 431〕。

ホールやアンダヤは少数派にとどまり、マタラム建国の経緯を詳しく述べるか簡単にすませるか、また歴史的事実として疑問を表明するかどうかはともかく、セノパティまたはパマナハンを建国者として述べている。パマナハンを取り上げるか否かによって二大別できるようである。セノパティを建国者とし、パマナハンを取り上げないものでは、年次を示さない場合〔Miksik 2004〕のほか、1582年とするもの〔Pluvier 1995; Turner 1997;



## マタラムの建国年次について

Jessup 1990; Vlekke 1943〕と1584年とするものがある〔Cribb 2000; Headley 2004〕。

他方で、セノパティを建国者と明記せず、パマナハン（セノパティとともに）設立者とする、あるいはパマナハンがマタラムを獲得したことを述べるものがある。パマナハンがマタラム領主になった年次を記さない場合〔ENI 2: 442 (Kotta Gede); Lombard 1990〕もあるが、1570年頃とするもの〔Smithies 1986〕と1570年代とするものがある〔Carey 1988; Ricklefs 2001; Supomo 1996〕。セノパティの在位が記される場合は1584年頃からとされる。

## 5 マタラム建国者はパマナハンかセノパティか

年次の問題はしばらく置くとして、パマナハンとセノパティが歴史的実在だとした場合、我々はいずれを建国者とみなすべきであろうか。

第2節で紹介したあらすじによれば、マタラムは服属国として建国した(3)ものが独立国に上昇し(5)、さらに中心勢力に発展する(8)というコースをたどった。同様の例にムラカ (Melaka, マラッカ)、ドゥマック、バンテン (Banten) などがある。ムラカの建国 (1400年ころ) はアユタヤの支配権下であり (マジャパヒトの圧力も強かった)、アユタヤからの自立を達成したのはムザッファル・シャー (在位1445-59年) の時代であった。ドゥマックの建国 (15世紀末ないし16世紀初め) はマジャパヒトの支配下であり、やがてマジャパヒトを倒した。バンテンの建国 (1525年ころ) はドゥマックの支配下であり、その建国者グヌンジャティ (Gunung Jati) は終生ドゥマックの宗主権を認めていたといわれる。このように一般的な歴史叙述において、いずれも独立国の地位を獲得したときや中心勢力の権威を樹立したときではなく、服属国として建国されたときが建国年とされる。マタラムについても、これら諸国の例にならって、パマナハンがマタラムの

領主になった段階（あらすじの3）で建国とみなすのが妥当である<sup>9)</sup>。

では、セノパティを建国者とみなす説の根拠は何なのか確認しておきたい。それはパマナハンの死去によってマタラム領主の地位を継承したことではなく、パジャンのスルタン（ジョコ・ティンキル、アディウィジョヨ）を倒し、その死後にその地位を継承したことにある。すなわち、このときセノパティは、パジャンからプソコ（神器）を自らのものとしたことによって、ジャワの正統な唯一の王の立場を継承したとされるのである。マジャバヒト・ドゥマック・パジャン・マタラムというジャワの一連の、連続する正統な王位を継承したことを以て、セノパティをマタラムの初代王、建国者とみなしているのである。その年次は、アンダヤのいうとおり1580年代であるが、ジョコ・ティンキルの没年に連動していて、1582年説、1586年説、1588年説があって一定しない。ただし、1584年説は、セノパティがマタラム領主の地位を継承した年であるので、除外すべきである。

セノパティを建国者と見なすことは、マタラム諸王をジャワの正統の中に位置づける BTJ の立場を受け継いでいることになる。セノパティがプソコを継承する部分を参考までに資料にあげておく。このような語りが歴史的事実を反映しているとみなすべきかという問題があるが、ここでは立ち入らない。

## 6 パマナハンがマタラムを獲得した年次

次の問題はパマナハンがマタラムに入った年次である。

いままで見てきたように、年次を記さないものがある一方で、1568年説のほか、1570年代とするものがある。そしていままで取り上げなかったが、1578年説がある。

このうち1568年説は少数派である。これはジョコ・ティンキルがパジャンのスルタンに即位したとされる年であり、この時にパマナハンがマタラ

## マタラムの建国年次について

ムの領主になったとの解釈である。しかし、ジョコ・ティンキルはパマナハンへの約束をなかなか実行しなかった。スナン・カリジョゴの介入によって初めて約束が実行されたというので、その年は1568年よりかなり後つまり多数派の1570年代説が妥当であろう。

1570年代とする説のなかで具体的な年次を示すのは1578年説だけである。この説を最初に提起したのはおそらくドゥ・フラーフである。

彼は1949年のインドネシア通史ではパマナハンが現在のコタグデに定着した年次を明記せず、そこに小国を立て、1575年ころに死去したはずと記す〔Graaf 1949: 100〕。この1575年説の根拠は示されていない。

その後彼は1954年に各種資料（オランダ語・ポルトガル語資料を含む）を総合したセノパティに関する研究を発表し、その中でパマナハンがコタグデにクラトン（王宮）を構えた年次として1578年説を提起した。そして1584年に死去したとする。1578年説に関わる資料はジャワのババッド・サンコロ（Babad Sangkala）; BTJ; スラット・コンド（Serat Kandha）、またヨーロッパのラッフルズ（Raffles）およびハーヘマン（Hageman）であるという。おおむね以下のように説明される〔Graaf 1954: 54〕。

BTJ（メインスマ版174頁）によれば、プレレット（Pleret）のクラトンが陥落したときマタラム王国はちょうど100年であったという。プレレットの陥落は1677年6月29日なので、ここからさかのぼらねばならない。太陽暦か太陰暦かの問題がある。おそらく1633年までは太陰暦、それ以前は太陽暦である<sup>6)</sup>。かくして1578年となる。このクラトンが設立されるまで〔アルヨ・パナンサンが倒されてから〕20年の対立と混乱の時期があったことになる。

パマナハンマタラムのクラトンを設立後そこにどれくらいいたであろうか。後のオランダの情報（Jacob Couper）によれば、6年間マタラムに生きていたというので、1584年がパマナハンの死去とセノパ

ティの出現のときであるが、これとは別に1583年とする資料もある。

メインスマ版 BTJ の再版にあたって編集者となり、長い解題を書いたラスは、解題中の略年表において「1578年コタゲデ (Kota Gede) 設立」としている [Ras 1987b: LXIV]。またその本の裏表紙の紹介文では「マタラム王国 (1578-1677)」<sup>7)</sup> と記している。ただしラスはこの年次の根拠を示していない。ドゥ・フラーフの説に依拠しているのかもしれないが、不明である。

マタラムの王宮はスルタン・アグンによってコタゲデから、その南5キロのクルト (Kerto) に移され、スルタン・アグンを継いだアマンクラット1世によってクルトの東1キロのプレレットに移された。2000年代になって、プレレットの王宮跡に考古学博物館 (Museum Purbakala Pleret) が設立された。そこに展示されるマタラム王国年表ではドゥ・フラーフ説に従ってと明記しつつ、1578年にパマナハンによってマタラムが建てられ、1584年に彼が死んでセノパティが継承したとされている。

以上の他に、Sabdacarakatama [2010: 50-60] も1578年説をとっているが、その根拠は示されていない。

### まとめと今後の課題

マタラム王国の建国者については3つの立場がある。

第一は、ホールやアングダヤのように、BTJ を依拠すべき史料から除外する立場である。この場合、パマナハンはもちろんセノパティも、スルタン・アグンのもとで発展するマタラム王国のあいまいで神話的な前史として、建国者は特定しないことになる。建国年次は当然明示できない。

第二は、第一の立場と対照的に、BTJ (およびその他のジャワ語文献、また欧文史料) に依拠するものである。この場合、パマナハンとセノパティを歴史的事実とみなすことになる。このうち、パマナハンがマタラム領主

## マタラムの建国年次について

になったことを以てマタラムの建国とみなすのが第二の立場である。その年次は諸説あるが、いずれにせよ1570年代であり、1578年に特定する説が有力に思われる。この場合、パマナハンの死去とセノパティによるマタラム領主の継承は1584年であり、セノパティがパジャンのスルタンを倒し、スルタンが死去したのは1587年、セノパティがジャワの正統な王となるのは1587年または1588年となる〔Graaf 1954: 89-103〕。

第三は、セノパティを建国者とみなすものである。その根拠はマタラム領主の継承ではなく、ジャワの正統な王の地位を継承したことにある。具体的にはパジャンに伝承されたプソコを獲得したことである。その年次については、1582年、1586年、1587年、1588年とする説がある。

筆者はさしあたり、第二の立場が妥当と考えている。ムラカ、ドゥマック、バンテンなどと同様に属国としての建国をその国の建国とみなしてよいであろう。さらに、第三の立場は、プソコすなわちマジャパヒト・ドゥマック・パジャンと連なる、正統な王位を表象する神器の存在が実証しがたいだけでなく、あまりに物語性が強いと感じられるからである。

今後の課題としては、まず、第一の立場の論拠を再検討する必要がある。第二の立場については、ちょうど100年という BTJ の語りを文字通りに受けとるべきかという問題がある<sup>8)</sup>。そして、第二、第三の立場について、1578年説以外の年次の根拠も再検討すべきであろう。とくにセノパティがマタラム領主を継承したのを1575年とする説、またセノパティがジャワの正統な王位を継承したのを1582年とする説である。

資料 セノパティがベノウォをパジャンのスルタンに立てる（メインスマ版 BTJ のオランダ語訳からの重訳）〔Ras 1987b: 99-100〕

〔プングリを倒し、これをドゥマックに送り返した後〕セノパティ・ガラガ、パンゲラン・ベノウォそしてその部隊は祝宴をもった。勝利を得た

ばかりの時に行うのが習わしであり、喜びの中であらゆる願望を満足させた。パンゲラン・ベノウォは兄セノパティに言った。「兄上、お願いがあります。パジャンの統治を受け入れ、亡き父上の後を継いで下さい。長男なのですから。わたしはまったく異存ありません。貴族として生きていけば十分です。亡き陛下が残された財宝もお任せします」

セノパティは答えた。「弟よ、お前の信頼はたいへんありがたいが、わしはここパジャンで王になろうとは思わぬ。わしはマタラムで王となるだけだ。それは亡きスルタン陛下によって与えられたものだから。さらには、わしと我が子孫がマタラムで偉大な王になることは、すでにアラーによって定められている。パジャンについては、ここにわしはお前を、我らが亡き陛下の後継者として王に立てよう。遺産からは、わしは銅鑼キヤイ・スカルドゥリマ、馬銜キヤイ・マチャンググ、鞍キヤイ・ガタユ、そしてあの祝福をもたらす聖遺物だけを所望する」

パンゲラン・ベノウォは、所望されたものはあなたのものですよと言い、2人はクラトン〔王宮〕に入った。翌朝、古くからのあらゆる聖遺物がマタラムに運ぶためにクラトンから取り出された。その後セノパティ・ガラガとパンゲラン・ベノウォは外に出て、パグララン〔謁見場〕におもむいた。セノパティは絨毯の上の黄金の椅子に座した。その前にマントリたちとブパティたちが恭しく座った。セノパティの表情は明るく輝き、パンゲラン・ベノウォを自分の横に座らせ、拝謁する多くの者たちに言った。「ブパティたち、マントリたち、みな証人たれ。わしは弟パンゲラン・ベノウォを、我らが亡き父上の後継者として、パジャン王国を統治するスルタンに立てる」

ブパティたちとマントリたちはこぞって賛意を示した。パンゲラン・ベノウォがスルタンに立てられるとは予想外であったので、セノパティへの尊敬はさらに高まった。続いてセノパティは弟に次の指示を与えた。王国

## マタラムの建国年次について

の安全に配慮すること、慎重さを失わないようにすること、3種類の人々をもつように気をつけること、第一に宗教教師たち、第二に占星術師たち、第三に苦行者たち。王国の秩序について困った時には聖戦者に助言を求めよ、将来を知りたければ占星術師に尋ねよ、魔力について何か知りたければ苦行者に教えを請え。

パンゲラン・ベノウォはセノパティに感謝した。こうしてセノパティはマタラムに戻るため別れを告げ、部隊を率いて出立した。マタラムに到着した。続いてセノパティはマタラムのスルタンに即位した。しかし彼はスルタンと呼ばれなかった。世間はみな彼をパヌンバハン・セノパティとのみ呼んだ。

## 注

- 1) セノパティのカタカナ表記はセーナパティ、セナパティ、スノパティなどがある。このうち語頭の Se をスと表記するのはジャワ語としては正しくない。第2音節は na とも no とも表記され、どちらも誤っているわけではない。本稿では現在のジャワ語の発音で一般的なノとする。したがって、セノパティとする。
- 2) 『岩波講座東南アジア史』の第3巻「東南アジア近世の成立」では鈴木〔2001：96〕がマタラム王国に簡単に触れるだけである。筆者にはマタラムの重要性が軽視されているように思われる。
- 3) BTJ は17～18世紀に関しては歴史史料として利用される（深見2003参照）。
- 4) その編纂過程に関しては鈴木〔2004：200-201〕参照。
- 5) パマナハンを初代とするなら、セノパティ（1601死）が第2代、クラブヤック（位1601-1613）が第3代、スルタン・アグン（位1613-1646）が第4代となる。『インドネシアの事典』の項目「スルタン・アグン」〔宮坂1991〕も『新版東南アジアを知る事典』の項目「スルタン・アグン」〔深見2008a〕もスルタン・アグンを第3代としているのは間違いということになる。
- 6) スルタン・アグンは西暦1633年（シャカ暦1555年）にそれまでの太陰太陽暦であるシャカ暦に替えて太陰暦であるヒジュラ暦を採り入れ、ジャワ暦と

した。ただし年号は従来のものを継承した。かくして西暦1633年7月8日がジャワ暦1555年第1月第1日となり、これ以前は太陰太陽暦、以後は太陰暦が行われることとなった。

- 7) ラスはマタラム王国の滅亡を今までみてきた1755年ではなく1677年として  
いる。王宮または王都の所在地を国名とするジャワの伝統に従っているの  
である。王宮はコタグデからスルタン・アグンによりクルトに、アマンクラッ  
ト1世によりプレレットに移されたが、いずれもマタラム（現ジョクジャカ  
ルタ）地方に位置した。王都プレレットは内乱によって崩壊し、1677年パジャ  
ン地方のカルタスラ（Kartasura）に遷都されたので、ジャワの伝統ではこれ  
以後をカルタスラ王国と呼ぶ。その後王宮は1746年スラカルタ（Surakarta）  
に移ったので、スラカルタ王国となった。ついで内乱のため二等分されるこ  
とになり、1755年にジョクジャカルタ王国が成立した。スラカルタ、ジョク  
ジャカルタ両王国とも1945年インドネシア共和国が成立するまで存続した。
- 8) BTJ における100年を文字通り受け取るべきではないとする指摘がある  
（宮坂1984参照）。

## 文 献

### 日本語

- 生田滋 1984「国家の形成と高文化」大林太良編『東南アジアの民族と歴史』  
山川出版社161-250.
- 生田滋 1998「東南アジア群島部における『商業の時代』から『開発の時代』  
へ」石澤良昭・生田滋『東南アジアの伝統と発展』中央公論社357-392.
- インドネシア共和国教育文化省著、森弘之・鈴木恒之訳1982『世界の教科書  
歴史 インドネシア』ほるぷ出版
- 鈴木恒之 1977「インドネシア人とオランダ人」和田久徳・森弘之・鈴木恒之  
『東南アジア現代史Ⅰ総説・インドネシア』山川出版社
- 鈴木恒之 2001「オランダ東インド会社の覇権」『岩波講座東南アジア史3 東南  
アジア近世の成立』岩波書店95-120.
- 鈴木恒之 2004「あるべき歴史像を求めて——独立後インドネシア歴史学界の  
模索」根本敬編『東南アジアにとって20世紀とは何か ナショナリズムをめ  
ぐる思想状況』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所191-207.



## マタラムの建国年次について

- スロト著, 伊東定典訳1983『全訳 世界の歴史教科書 インドネシア』帝国書院
- 土屋健治 1991「マタラム」土屋健治・加藤剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎407.
- 永積昭 1961「マタラム」『アジア歴史事典 8』平凡社352-3.
- 永積昭 1977『アジアの多島海』講談社
- 弘末雅士 1999「交易の時代と近世国家の成立」池端雪浦編『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』山川出版社82-137.
- 深見純生 2003「近世ジャワ宮廷の文化世界」『岩波講座東南アジア史』別巻, 岩波書店63-67.
- 深見純生 2008a「スルタン・アグン」桃木至朗他編『新版東南アジアを知る事典』平凡社231.
- 深見純生 2008b「マタラム」桃木至朗他編『新版東南アジアを知る事典』平凡社426.
- 宮坂正昭 1984『『ジャワ年代記』の時空性——分裂国家マタラム宮廷作家の世界像』『東南アジア研究』22-1: 34-52.
- 宮坂正昭 1991「スルタン・アグン」土屋健治・加藤剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎245.

## インドネシア語

- Bambang Harsrinuksmo 2008: *Ensiklopedi Keris*, Gramedia, Jakarta.
- Graaf, H. J. de 1985a: *Awal Kebangkitan Mataram: Masa Pemerintahan Senapati*, Grafiti Pers dan KITLV, Jakarta. (Graaf 1954の翻訳)
- Graaf, H. J. de & Th. G. Th. Pigeaud 1985b: *Kerajaan-kerajaan Pertama di Jawa: Kajian Sejarah Politik Abad ke-15 dan ke-16*, Grafiti Pers dan KITLV, Jakarta. (Graaf 1974の翻訳)
- Habib Mustopo *et.al.* 2007: *Sejarah 2: Sekolah Menengah Atas Kelas XI: Program IPS*, Penerbit Yudhistira.
- Hamamintadipura 2006: *Babad Kraton Mataram*, Intermedia Paramadina, n. p. (Surakarta).
- I Wayan Badrika 2006: *Sejarah untuk SMA Iolod 2 Kelas XI Program Ilmu Sosial*

*Berdasarkan Standar Isi 2006*, Penerbit Erlangga.

Magdalia Alfian, Nana Nurliana Soeyono & Sudarini Suhartono 2003: *Sejarah untuk SMA dan MA Kelas XI Prograam IPS Standar Isi 2006*, Penerbit Erlangga.

Masyhuri 1990a: “Mataram”, *Ensiklopedi Nasional Indonesia*, 10: 191-197.

Masyhuri 1990b: “Senopati, Panembahan”, *Ensiklopedi Nasional Indonesia*, 14: 527-8.

Muhamad Taupan 2008: *Sejarah Bilingual: untuk SMA/MA Kelas XI Program IPS*, Yrama Widya, Bandung.

Mulia, T. S. G. & K. A. H. Hidding eds., n. d.: *Ensiklopedia Indonesia*, 3 vols., W. van Hoeve, Bandung / ‘s-Gravenhage.

Purwadi 2007: *Sejarah Raja-raja Jawa: Sejarah Kehidupan Kraton dan Perkembangannya di Jawa*, Media Abadi, Yogyakarta.

Sabdacarakaama 2010: *Ensiklopedia Raja-raja Tanah Jawa: Silsilah Lengkap Raja-raja Tanah Jawa dari Prabu Brawijaya V sampai Sri Sultan Hamengku Buwono X*, Narasi, Yogyakarta.

Uka Tjandrasasmita ed. 1992: *Sejarah Nasional Indonesia III: Jaman Pertumbuhan dan Perkembangan Kerajaan-kerajaan Islam di Indonesia*, Balai Pustaka, Jakarta.

Yulianti 2007: *1700 Bank Soal Sejarah Indonesia dan Dunia untuk SMA/MA*, Yrama Widya, Bandung.

## 欧文

Andaya, Barbara Watson 1992: *The Cambridge History of Southeast Asia*, vol. 1, Cambridge University Press: 402-459.

Carey, Pieter 1988: “Mataram”, Ainslie T. Embree ed., *Encyclopedia of Asian History* 2: 509-510.

Cribb, Robert 2000: *Historical Atlas of Indonesia*, Curzon.

ENI *Encyclopaedie van Nederlandsh Oost-Indië*, 8 Vols., Martinus Nijhoff & Brill, 1917-1939.

Graaf, H. J. de 1949: *Geschiedenis van Indonesië*, W. van Hoeve, ‘s-Gravenhage/ Bandung

Graaf, H. J. de 1954: *De regering van Panembahan Senapati Ingalaga*, ‘s-

## マタラムの建国年次について

- Gravenhage (VKI 13).
- Graaf, H. J. de 1965: “Later Javanese Sources and Historiography”, Soedjatmoko *et. al. ed.*, *An Introduction to Indonesian Historiography*, Cornell University Press: 119-136.
- Graaf, H. J. de & Th. G. Th. Pigeaud 1974: *De eerste Moslimse vorstendommen op Java: Studiën over de staatkundige geschiedenis van de 15de en 16de eeuw*, ‘s-Gravenhage (VKI 69).
- Graaf, H. J. de & Th. G. Th. Pigeaud 1976: *Islamic States In Java 1500-1700: A Summary, Bibliography and Index*, ‘s-Gravenhage (VKI 70).
- Hall, D. G. E. 1981: *A History of South-East Asia*, 4<sup>th</sup> ed., Macmillan.
- Headley, Stephen C. 2004: *Durga’s Mosque: Cosmology, Conversion and Community in Central Javanese Islam*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore.
- Jessup, Helen Ibbitson 1990: *Court Arts of Indonesia*, Asia Society Galleries, New York.
- Lombard, Denys 1990: *Le Carrefour Javanais*, 3 vols., EFEO.
- Miksik, John N. 2004: “Mataram”, Ooi Keat Gin ed., *Southeast Asia: A Historical Encyclopedia from Angkor Wat to East Timor*, 2: 863-6.
- Pluvier, Jan. M. 1995: *Historical Atlas of South-East Asia*, Brill.
- Ras, J. J. ed. 1987a: *Babad Tanah Jawi: De prozaversie van Ngabehi Kertapradja voor het eerst uitgegeven dcoor J. J. Meinsma en getranscribeerd door W. L. Olthof*, Foris.
- Ras, J. J. ed. 1987b: *Babad Tanah Jawi: Javaanse rijkskroniek: W. L. Olthofs vertaling van de prozaversie van J. J. Meinsma lopenden tot het jaar 1721*, Foris.
- Ricklefs 2001 (3d ed.): *A History of Modern Indonesia since c. 1200*, Palgrave Macmillan.
- Smithies, Michael 1986: *Yogyakarta: Cultural Heart of Indonesia*, OUP.
- Supomo Suryohudoyo 1996: “Sultan Agung — Epitome of Javanese Kingship” Anthony Reid ed., *Early Modern History*, Archipelago Press, Singapore: 54-55.
- Turner, Peter *et. al.* 1997: *Indonesia*, 5<sup>th</sup> ed., Lonely Planet.
- Vlekke, Bernard H. M. 1943: *Nusantara, A History of Indonesia*, Van Hoeve, The Hague.

# **The Year of Foundation of Mataram Kingdom : A Problem between Literature and History of the *Babad Tanah Jawi***

Sumio FUKAMI

The kingdom of Mataram emerged in Central Java in the latter part of the 16<sup>th</sup> century, and in the following century became one of the leading powers of Southeast Asia. There is a divergence among scholars regarding the date of this kingdom's founding. The present article examines the background to this scholarly debate, and also, on the basis of current research, proposes the year 1578 as the most likely date.

The origins of the divergence lie in the nature of the text upon which historians have relied, namely the Javanese chronicle *Babad Tanah Jawi* (History of the Land of Java). The chronicle was first compiled in the 18<sup>th</sup>-19<sup>th</sup> century as a paean justifying the rule of the present king and of the king's ruling house, and presented to the king. The quandary for historical researchers has been whether this document should be read as literature or as history.

The present article focuses on an issue that arises when the chronicle is understood as a historical text: namely, whether the establishment of the kingdom should be dated to the year when Pamanahan became the lord of Mataram as a vassal of Pajang, or to the year when Pamanahan's son Senopati became ruler of Java in place of the king of Pajang. I argue that the former is the more appropriate, and that, among the various dates that have been suggested, 1578 is the most likely date for the kingdom's founding.